

---

Merry merry Christmas .

弥招 栄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Merry merry Christmas .

### 【NZコード】

N1132D

### 【作者名】

弥招 栄

### 【あらすじ】

レストランも予約した。指輪も買つた。台詞も寝ないで考えた。今日は運命の日だ！俺は勇んでその日を迎えた。彼はなんだか浮かれている。単純な性格だから、よくわかる。でも、あたしの心は決まっている。今日は、クリスマス……

(前書き)

この小説は、ギフト企画参加作品です。他の方の作品は、「ギフト企画」で検索していただければ、読むことができます。では、お楽しみくださいませ。

なあ、神様つて信じてる？ なんとなく？ やつぱりなんとなくか。そうだよな。お前、日本人だもんな、つて俺もだけどさ。でも、俺は神様は存在しているつて思つてるんだ。別に、神様が見えるつてわけじゃないぜ？ 違うつて、別に宗教にはまつたりなんかしてねえつて。俺はさ、不可知論者だから。不可知論。知らない？

不可知論てのはさ、神様はいるかもしれないけれど、それを人間は感じることはできないってこと。よくいうだろ。外国じゃ、無神論者は嫌われるから、神様を信じなくとも、不可知論者だつて言つとけつて。覚えといたほうがいいぜ。

でもさ、俺はそういう消極的な不可知論者じゃなくて、積極的な不可知論者なんだ。にもかかわらず、つていうか、だからこそつていつか、運命論者もある。そう、俺、運命つて信じてるんだよ。なぜかっていうとさ、お前、決定論つて物理哲学知つてる？ ラプラスの悪魔とかさ……知らないか。たとえさ、この世の中は、すべて物理法則にしたがつて動いているわけじゃん。ボールをひとつ、他のボールにぶつけたら、それぞれがどんな動きをするかっていうのは、最初にどんなスピードと角度でボールを投げたかがわかれば、予測することができる。つてことはさ、今この瞬間の、全宇宙のすべての物体の動きがわかれば、どんな未来だって予測できるはずだ。そりや、そんな、すべてを知ることなんか不可能だよ。でも逆に言えばさ、俺たちがすべてを知らうが知るまいが、未来は決まっている。それが、決定論でいうやつなんだ。

だけじさ、それは量子論で理論に否定された。不確定性原理つて

いつてさ、すごく小さい、分子とか原子とかよりも小さな、素粒子つてレベルだと、それがどこにあって、どんな動きをしているのかつて言うのが、確率的にしかわからないうつていうのがわかつちゃつたんだ。

これは知つてるんじゃないか？ ドラマにもなつたしさ。「神はさいころを振らない」って。これはアルバート・アインシュタインて人が、そうそう、あつかんべーしてる人、そいつがさ……そいつつて言つちまつた。まあいいや、その人がさ、不確定性原理にむかついて言つた言葉なんだ。神の創りたまひし世界が、そんな偶然に頼つたような頼りないものであるはずがない、ってことだと思う。でもさ、いろんなことが、その不確定性原理に基づいて考えると、いろいろすつきりするんだよな。ていうか、それがないとうまく説明できないんだ。お前の持つてるケータイなんかも、この原理に基づいた量子論がなかつたら、できてないんだ。

面白いよな。科学つてのはさ、進歩したらいろんなことができるようになるんだって思うだる。そのケータイだつてそうだし、宇宙旅行も金さえあればできるようになつたし。でも逆なんだよ。科学が進歩すればするほど、人類に出来ないことが増えていく。いや、そつなんだつて。

量子論とかカオス理論が生まれて、人は未来の予測が出来ないことがわかつてしまつた。

それに反対したアインシュタインが作つた相対性理論のせいで、人は光の速さを越えて旅をすることができなくなつた。イスカンダルまで一年で行つて帰ることなんか、絶対に無理だつてわかつてしまつた。……ヤマト、知んない？ いや、なんでもない。

その前の一二コートンの時代でもそうだ。太陽の周りを回る惑星の動きを、正確に予測することができないことが証明されてしまつている。

科学が進歩するにしたがつて、出来ないことがばかりが増えていく。もちろん、進歩する前はもっと出来ないことが多かつたんだけどさ、

でも、何でもできるかもしないって、きっとみんな思つてたんだよ。だけどそうじやない。それつてさ、やっぱなんか悔しいじゃん。世界に対して、俺たちがそんなに無力だなんて。

だから俺は、神様がいるって信じてる。いや、信じたいんだよ。べつに、ヤーワーとかアッラーとかそんなんじやなくてさ、別に世界を七日間で作つてなくともいいからさ、たとえ、俺の想像の中だけの存在としてもさ、その神様には、未来がわかるし、ブラックホールに落ちたものを拾う事もできる。そんな存在があつて欲しいって思つ。いや、いるに違ひない……

「でも、そのプチうんちくをひらけかしたいだけのために、わざわざいさんところを予約したつてわけ？」

せつせつとティナーのコースを平らげて、飲み慣れないワイングラスを片手に熱弁をふるう俺を、プチトマトを串刺しにしたフォーカスを左手で振り回しながら、美月がジト目で睨んでいた。やべえ。クリスマスだからと柄にもなく奮発したレストランの雰囲気に緊張しちまったのかな。まだボトル半分も空けてないのに、つうか、そのほとんどを美月が空けているのに、酔いがすごいぶん回つてる。すこし落ち着こうと、グラスを口に運ぶ。うめえ。高い金ふんだくるだけのことはある……つて、飲んでどうする。

「違うつて。俺が運命を信じてるつていうのをや、うん、説明したかつたんだ」

あわてて弁解する俺を尻目にプチトマトを口に放り込むと、ウーライターが皿を下げる間に、グラスに残ったワインをゆっくりと飲み干した。やばいなあ。こいつ、酒乱の氣があるんだよなあ。

「でもさ、運命を信じてたら、つまんなくない？ 何をやつたって未来は決まつてるって、そんなんじや、何もする氣になれないじやない」

お、まだ大丈夫か。ふつとため息をついて髪を書き上げる美月の目の下が、ほんのりと染まっている。すこしその目が座っているような気がしないでもないけど、それ以上にいろいろっぽい。わお。

「お前、映画観るのが好きだろ?」

「好きだよ?」

「映画つて、映画館にかかるてる時点で、もつラストが決まってるだろ? つまらないか?」

「つまらなかつたら観ないわよ」

「だろ? たとえ運命によつて未来が決まつてもさ、神様がそれを知つてもさ、俺たちにとつては全部が始めて観るシーンなんだ。だから、運命を信じたところで、別につまんなくないさ」

「そんなもん……かなあ」

んんん、どうなりながら、美月は左手に持つた空のグラスを睨みつける。負けず嫌いの彼女にとつて、言い負かされそうになつてゐるのが気に入らないらしい。普段ならこれくらいで言葉につまるような彼女ではないのだけれど、やつぱりワインと雰囲気に酔いかけているのだろうか。その様子を勘違ひしたのか、ソムリエが寄つてきて、どうぞ、とワインをサーヴしてくれる。美月はあわててグラスを差し出して、あ、どうも、すいませんなんて言いながらへこへこする。わはは、かつペ丸出し。吹き出しかけた俺を渋い中年ソムリエはじろりと睨んで、テーブルから離れていつた。うん、女性に恥をかかせてはいけないね。反省。

「でもさあ」ワインを一口飲んで、美月。「何度観ても面白い映画もあるわよ」

「それはまあ、人それぞれ、人生それぞれ。何度見たつてストーリーが変わるわけじゃない……つていうか、そういう話をしたいわけじやなくてさ」

「じゃあ、なによ」

俺は、キャンドルの影が揺れるテーブルにグラスを置くと、ネクタイを直す振りをしながら、ポケットの中身をそつと確かめた。小

さな四角い感触が、ポケットの上から掌に伝わる。これからが本番だ。ちらりとボトルのワインに目をやつて、やつぱり断念する。祝杯用に残しておかないと。

「だからさ、俺と“君”が出会ったのも、いつして付き合つよつてなつて、愛し合つているのも、運命だつたんだ！」

店内に流れる静かなクラシック音楽が、ついにクライマックスを迎える、盛大に鳴り響く！

「……」

が、どうやらそれは幻聴だつたらしい。動きをとめた美月の眼が、じーっと俺を見ている。うわあ。あれは多分、笑つたらいいのか馬鹿にしたらしいのか聞かなかつた振りをすればいいのか迷つてている目だ。

「で、でさ」

俺は予定をすこし変更して、あわててポケットに手を突っ込んだ。本当は、手を胸か頬に当てて、瞳をうるうると潤ませた彼女が、そうだつたのね！ なんて感動に浸つたところで出すはずだつた小箱を取り出す。……つて、もしかしたら俺は馬鹿だつたのかもしれない。一人で妄想を膨らませて盛り上がり浮き上るのは、俺の悪い癖だ。癖……なのか？ まあいいや。

「美月。これを受け取つて欲しいとと」

あわてたせいがワインの酔いのせいか緊張したせいか、俺の手から勝手にこぼれ落ちた小箱が、こんこんこんと音を立てて転がつて、ちょうど美月の目の前でとまる。しらけた目で、彼女がそれを見下ろす。ああもう、なんかいろいろやり直したい。

「ふーん」テーブルの上に突つ伏した俺の上から、美月の声が振ってくる。「ねえ、開けていい？」

なんか、その声がかわゆくなつた気がして、俺はそつと顔をあげ、上目遣いで美月を見た。赤いリボンをかけたその箱を、美月は左手に持つて、じつと見ていた。復活のきざしつ！

「もちろん。そのために用意したんだ」

彼女は、立ち直った俺の目を三つ数えるほどの時間覗き込んだ後、すこし微笑んで器用にリボンを解いた。包装紙を破らないように丁寧に広げ、深い青色の小箱の口を開ける。今だ。

「美月、結婚して欲しい

「やだ」

それが、俺が信じる、ただひとつの運命なんだ。

「え」

三日寝ないで考えたプロポーズの台詞の途中であつさうと拒絶されて、俺は身を乗り出したまま凍りついた。

なんでだよ？

冒頭の長台詞からこのプロポーズまで、完璧な流れだつたじゃないか。だつたよな？ あ、いや、違うかもしれないけれど、でも、こいつと付き合つて三年、あらゆる難難辛苦を乗り越えて、後はどちらが結婚を言い出すか、そんな感じになつてたじやないか。もしかして、それも俺の思い込みだつてのか？

だが、美月の台詞には続きがあつた。

「つて言つたらどうする？」

美月は箱の中からリングをつまみ出すと、それを左手の人差し指の先つちよに引っ掛け、くるくると回した。そのふざけたしぐさとは対照的に、彼女の目は真剣そのものだつた。

「あんたつてさ、何かうまく行かないことがあつても、あんまり落ち込んだりしないじゃん。すぐに笑つて諦めちゃつてさ」

リングをぶら下げたままの左手でワイングラスをつかむと、中身を一気にのどへと流し込む。真剣なまなざしが、座つてくる。「う、怖いよ。

「付き合つてるのは、あんたのその性格が楽だつたけど、でも、すこし不安になつたりもするのよ。ねえ、いやだつて言つたら、あんたはそれを運命だと諦める？ いつもみたいに、まあいいやつて笑いながらさ」

うわ、絡み酒の前兆だ……思わずのけぞりかけた俺は、息を呑ん

だ。大きく見開き、俺を睨んでいる彼女の瞳に涙があふれ、そして頬を伝つていつた。

「あたしは運命なんて信じない。あたしがあんたと出会つて、あんたを好きになつたこの気持ちが、運命で決まつていたなんて、そんなのばかにしてる。冗談じやないわ」

§

あたしがあんたに初めて会つたときは、はつきりと覚えているよ。あたしのバイクがダンプに巻き込まれたときに、救急車が来るまでずっとそばにいて、ずっと声をかけ続けてくれていた。あたしが事故つたときに、何台か後ろを走つていた、ただそれだけだったのにね。その両手も、顔も、あたしの血で真っ赤に染めて、あんたが怪我をしたみたいに泣きながら。自分でもおかしいと思うんだけどさ、そのときあたしは、なんか幸せだつたんだよ。あたしのために一生懸命になつてくれる人がいるつて、あんたの声を聴きながら、そんなことだけを考えてた。後で先生にも聞いたよ。あんたの応急処置がなかつたら、もしあんたが声をかけ続けていかつたら、あたしは多分死んでただろうつて。そりやそうだよね。右手と右足がちぎれていたんだから。

あたしが病院のベッドに縛り付けられているときも、あんたは何度もお見舞いに来てくれた。あんたがいなければ、あたしは右手と右足をなくしたショックから立ち直ることができなかつたと思つ。うん、きっとそう。

あんたが来てくれる週末が、あたしは本当に待ち遠しかつたんだよ？ 仕事やなんかで来てくれなかつたときは、本当に落ち込んでいた。

啓子はさ、知つてるよね？ 啓子。そう、その娘。そんなあたし

を見て、あの人気が、そうあんたのことよ、好きなんぢやないつて教えてくれた。そつかもしれないつて言つたら、運命の出会いぢやない、すごいね、なんて言つた。

あんたもそう思つてるのよね。あんたとあたしは、運命的な出会いをしたつて。

あんた今そつぱつたぢやない。いまさらぢよまかさなくともいいわよ。あたしだつて、そつ思つたもの。退院のとき、あんたも来てくれて、それであたしのこと好きだつて言つてくれたときは、あたしは身体のことや将来のことなんか、みんな忘れるくらいに幸せだつた。もうあたしには悪いこととは起つちらない、そんなことまで思つたわ。

もぢりん、そんなんはずはないのにね。あたしはそのひが、ご飯を食べるこども、着替えるこども、お風呂に入るこども、ハイレに行くこども、何もひとりではできなかつた。働くどじろか、ひとりで遊びに行くことすらできなくて。あんたがいなかつたら、あたしも、あたしの世話にかかりつきりになつてしまつた母さんも、いつか壊れてしまつていたと思つ。

退院してしばらく、あんたに当り散らしてたことあつたぢやない。覚えてる? もぢりんそつよね。あればさ、思い通りにならないいろんなことにイラついていたつていうのも確かにあつたんだけど、あんたのさ、なんていうんだろ、困つたような少し悲しそうな、そんなちよつと首をかしげた表情があたしは好きなのよ、それを見ていたかつたつてのが本当なの。……嘘よ。そんな泣きそつな顔しないでよ。

本当はね、あたしたちが出会つたのが運命なのだとしたら、あんたがあたしに出会つためだけに、あたしはこんな身体にならなければいけなかつたのかつて、あんたに逢つたために、あたしはこんなつらい思いをしなきやいけないのかつて、そう思つたら、あんたが無性に憎たらしくなつて。あたしが事故に遭つたから、あたしはあんたに逢えた。だつたら、あんたに逢わないでよかつたのなら、事故

にも遭わなくてすんだんだ。もちろん、そんなわけないのにね。

でも、だからあたしは、運命なんて信じない。運命信じている限り、あたしは、あんたと出会ったことを赦せない。理不尽だって解つててる。でもあたしは、そうなの。

「 それと、結婚がいやだつてこのと、どうこう関係があるんだよ」

和弥は、困ったようなすこし悲しそうな顔で、ちょっと首をかしげて、あたしに聞いた。話している間にずいぶん落ち着いたあたしは、その顔を見て吹き出しそうになる。そう、その顔が好きなのよね。

あたしがわがままを言つたときに必ず見せるその顔。そして、彼はそのあと必ず笑顔になつて、別のことにあるたしの気をそらそうと話を変える。あたしはそれが不満だつたけど、悪いのは自分だつて解つていたから、たとえそれがこの身体のせいだとしても、彼が悪いのではないことくらい解つていたから。そんな彼だから、あたしはわがままが言える。

空のグラスを、テーブルに戻す。人差し指にかけたままのリングが、グラスと触れて澄んだ音を立てる。

こんな高級そうなレストランに、臆さず入れるようになつたのも、和弥のおかげだ。慣れない左手一本で、あたしが料理を口に運ぶのに失敗してテーブルにこぼしても、彼は嫌そうな顔ひとつせず、それを拾つて自分の口に放り込む。次は何をくれるのかなあ、なんて笑いながら。そんなことを続けているうちに、あたしはテーブルを汚さなくとも、食事ができるようになつた。

「 言つたじやない。あんたが運命信じている限り、あたしはあんたを赦せないって」

「 ああ、だ、だからや、俺が運命信じてるって言つのはそういうことじやなくてさ」

うん、解つて。この人がそんなつもりで運命なんて事を言い出したんじゃないことは。酷いことを言つようだけど、彼はそんなことまで気が回るような頭のいい人じゃない。あたしを助けてくれたのも、その後お見舞いに来てくれたのも、ただお人よしだったから。人の悪意に鈍感で、人が喜んだら自分も嬉しくなつて。

そんな彼が世間をうまく渡つていけるはずもない。それは彼のよれよれのスーシや、あたしの指先に引っかかる安っぽいリンクを見ればわかる。彼は仕事をあまり話したがらないけれど、きつと会社でもいいように使われているんだろう。

「あんたがどういうつもりで言つたのかは知らないわよ。でも、あんたはあたしのことをぜんぜん解つてくれていない。それなのに結婚しようなんて、とんでもないわ」

こんな日の夜だから、店は幸せそうなカッブルでいっぱいだ。もしかしたら、このうちの何組かは、あたしたちのようにプロポーズしたりされたりしているのかもしれない。そしてあたしは

もし彼の申し出を断れば、彼があたしの前からいなくなれば、一度とクリスマスの夜を楽しむことはなくなるだろう。それでもいい。今でさえぎりぎりの彼の生活に、あたしのよつた重石が加われば、きつと彼は潰れてしまう。

「なあ、美月……」

「大体なんで、あたしなんかと一緒にになりたいわけ？　あたしと一緒に暮らして、どんないいことがあなたにあるわけ？　そりや、あたしはあんたのおかげで、自分のことは何とかできるようになったわよ。ご飯だつて食べれるようになつた。お風呂でおぼれることもなくなつた。着替えを手伝つてもらわなくともよくなつた。でも、それが精一杯。あんたには本当に感謝してる。命を助けてくれた、生きていく希望をくれた。もう十分。あたしにあんたは必要ない。あんたに、あたしが必要じやないのと同じよつにね」

ああ、言つちやつた。でもさつぱりした。多分、この人の重荷になつてしまつ、その思い自体が自分にとつて重荷だつたんだろう。

それはきっとあたしのせいじゃないはずだ。こんな身体になつたのは、あたしのせいじゃないはずだ。だとしたら、それは運命のせい。そうに違いない。

「違うんだ」

だけど和弥は、首を振つた。彼は、いつものように笑つた。

「何が違うのよっ！」

無意識に叩いたテーブルの音が、店内のざわめきを一瞬だけ奪う。周りのみんなが、あたしを見つめている。かまわないわ。本当にイラつく。ここは笑うところじゃない。あたしじゃなく、この人があたしを怒鳴り、なじり、怒つて席を立つ場面なのよ。じやないと……

「俺が運命を信じてるのはわざ

まだ言つてる。その笑顔にイラつきながら、でもあたしは田を離せない。だつて。

「うまいかないことを運命のせいにするためじゃないから。お前が事故つたせいだ、俺たちは知り合つた。勘違いするなよ。事故のおかげじゃない。事故のせいだ、だ。俺は、いくらでもお前から離れる機会はあつたよ。ほかのやつらのみたい、倒れたお前の横を知らん振りして通り過ぎてもよかつたし、お見舞いなんかに行かなくてよかつたし、告白なんかしなくてもよかつたし。そんなさ、いろんな決断を後悔しないためなんだ。だつてそうだろ？ 俺だつて、結構ショックなんだよ。お前にもう必要ないなんていわれてさ。俺にお前が必要ないなんて言つてさ。だつたら、お前を助けなけりやよかつた。お前を好きになんかならなきやよかつたつて」

彼の笑顔がなかつたら、あたしはいつでも、絶望していただから。

「でもさ、俺が、お前が好きで、ずっと一緒にいたいっていうのは、後悔してもしかたがないだろ？ だつて、運命だつたんだから。だからさ」

和弥は、テーブル越しに手を伸ばして、あたしの左手を取つた。

「だから俺は、お前にいやだつていわれたら、うんと言つてくれるまで、何度も繰り返すよ。俺は神様じゃないし、神様の声も聞こ

えないから、未来がどうなるのかなんてわからない。そんなもの、やつてみなけりや わからない。 そうだろ？ だから

あたしの人差し指の先からリングを抜き取つて、薬指にかける。

「結婚しよう。 それが俺の、運命という名の選択なんだ。 俺は、お前を失つて、後悔したくない」

本当にばかなんだから。 あたしはこれ以上泣き顔を見られたくなくて、顔を伏せた。 それが、この人に頷いているように見えるかもしないということは、解つていたけれど。 だつてしかたがないじゃない。 あたしの左手はこの人に握られている。 あたしの肩しか残つていない右手では、涙をぬぐうことなんてできないんだから。

「ありがとう」

和弥はそう言つて、リングをはめ込む手に力を入れる。 きっと彼は笑つている。 それを見たくて、あたしは顔を上げた。 のだけど……どうして顔が引きつっているの？

あたしの左手を握つたままの彼の手を見る。 リングは薬指の関節で引っかかつたままで、それ以上奥に入ろうとしない。

「え、と。 美月つて指輪のサイズ、いくつだっけ……？」

あたしは自分の左手を取り戻すと、黙つてグラスにワインを注ぎ、それを一気に飲み干した。 それをテーブルに叩きつけると、祝杯があ、なんて言つてる和弥を置いて、車椅子のレバーを操作し、席を離れる。

あたしは運命なんて信じない。 だけど、後悔はもつ、しない。 事故がどうとか関係ない。 今、この人が私の横にいる。

「結婚指輪は十号にしてよねっ」

星の代わりにイルミネーションの光が降り注ぐ歩道の上を、恋人

たちはゆっくりと進んでいた。

女は、電動の車椅子に座り、男はそっとそれを押していた。

「ねえ」

女の声に、男は足を止め、背もたれ越しに顔を寄せる。

「あたしは、やっぱり神様を信じているよ。恨んだこともあるけどね。でも、今は感謝してる」

「俺たちをめぐりあわせてくれたことに?」

女は、左手を男の頬に延ばして、そつと引き寄せた。薬指の途中で止まつたリングが、イルミネーションを反射してきらきらと輝く。

「ううん。そうじゃない」

女の火照った頬が、男の冷たい頬と触れ合つ。心地よさそうに、女は目を閉じる。通り過ぎる人々の楽しげなざわめきと、絶え間なく続くジングルベルが、一人を包み込む。

人々の微笑が、街を純白に輝かせる口。

Merry merry Christmas。

(雪がひらひらと舞い落ちる前に

fin

)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1132d/>

---

Merry merry Christmas .

2010年10月11日18時56分発行